【個人研究】

「白雪姫」のユング心理学的解釈
―否定的母親コンプレックスからの成長―

高　尾　浩　幸*

Jungian Psychological Interpretation of “Snow White”
―Developmental Process from the Negative Mother Complex―

Hiroyuki TAKAO

This article is dealing with Grimm’s fairy tale “Snow White” form analytical (Jungian) psychological point of view. When we take the step-mother as a representation of negative mother complex, this story would show us the developmental course of a girl under the influence of such a complex. Snow white, a symbol of pure feeling and loving capacity, has experienced loss of the true mother, got envy form the step-mother, went through loneliness, worked hard, been persecuted by the evil step-mother, fallen a deep sleep, awoke, and got married with a prince. Each experience has its own symbolical meaning and has contributed for her psychological development from child state to adolescence, from adolescence to a matured woman. For those who are under the strong influence of the negative mother complex, this story would give the clear understanding of the state they get involved in, and also offer the stimulation and encouragement to confront the complex. Based on this study, analysts could utilize this story in order to facilitate analysand’s psychological development from immature love.

1.　はじめに

「白雪姫」は、小さな頃からなじみがあり、誰でも知っているおとぎ話です。ディズニー映画にもなっているので、おそらくそのストーリーを知らない人はいないといっても良いくらいでしょう。また、白雪姫のお話が好きか嫌いかと尋ねられるならば、多くの人が、好きと答えるのではないでしょうか。

どんなところに魅力を感じるかは、人それぞれでしょうが、このお話には確かに多くの人を惹きつけ、心になにかを訴えかけるものがあるのです。特に読者が女の子、女性の場合、継母にいじめられること、魔法の鏡、美しさをめぐっての競争と嫉妬、森の中での孤立した生活、そして死と王子様の出現による再生、華やかな婚礼など、が自分の境遇と重ねあわされ、いやがうえにも空想の羽を伸ばしてしまうのでしょう。

物語の主人公にわが身を重ね合わせることは、心理的には同一化と呼ばれますが、おとぎ話を経験する上でとても大切なことです。この同一化を通して、おとぎ話が自分のものとなり、おとぎ話が自分に作用を及ぼしもするのです。このようにして、おとぎ話を読み、思い巡らし、ファンタジーの世界に遊ぶこと

* たかお　ひろゆき　文教大学人間科学部臨床心理学科

が、魂の癒しと形成に役立つようになるのです。

全ての文学作品がそうであるように、白雪姫にもさまざまな読み方、アプローチの仕方があります。皆さんは、主人公の白雪姫を何歳だと思われますか？　物語の初めに7歳になったとき、お妃より美しくなったとあるので、7歳以降のお話でしょうし、最後には王子と結婚しているのですから、少なくとも思春期を終えたあたり、10歳台の後半の年齢には達していると見るのが妥当でしょう。そして、継母に何度も命を脅かされるのですから、この母親はどうみても否定的な母親です。ユング心理学の物語解釈の特徴は、物語の登場人物をある個人の心的ないくつかの要素と見なすところにあります。つまり、白雪姫の場合、継母を白雪姫の否定的な母親コンプレックスと見て、解釈を試みるわけです。

もちろん、これはひとつのアプローチ法に過ぎませんが、このような見方を通して白雪姫を読むことによって、このおとぎ話の魅力の一端を発掘し、さらに臨床的には、知らないうちに否定的母親コンプレックスの影響のために「自分自身の生命」を生きることが難しくなっている人々へのヒントが得られるならば望外の幸いです。

2.　白雪姫

むかしむかし、冬のさなかに、ひとりのお妃がまっ黒い黒檀の窓枠のついた窓の側に座り、縫い物をしていました。ふと目を上げて舞い降りる雪を眺めたとき、お妃は針で指を刺し、血の滴が3滴、雪の上に落ちました。お妃は、「雪のように白く、血のように赤く、窓枠のように黒い子どもがほしいものだわ」と思いました。まもなくその通りの白雪姫が生まれると、すぐにお妃は亡くなってしまいました。

一年が過ぎると白雪姫の父親の王は、別の妃を迎えました。新しい女王は気位が高く、うぬぼれ屋で魔法の鏡を持っていました。

白雪姫が7歳になったとき、継母は魔法の鏡によって、もはや自分が王国で一番美しい女性ではないことを知りました。こう聞くと新しいお妃は妬みで黄色くなったり青くなったりして、狩人に子どもを殺すように命じます。しかし、かわいそうに思った狩人は、白雪姫を森の奥に独りで行かせました。かたやお妃は、白雪姫の肺と肝と言われたものを食べてしまいました。

白雪姫は森をぬけて、7人の小人たちの家を見つけました。山で金や鉱石を掘り出していた小人たちにいきさつを話し、白雪姫は一種の家政婦として迎えられました。お城のお妃は魔法の鏡から、白雪姫が、まだ生きていることを知らされました。妬ましさと悔しさで落ち着かなくなったお妃は、白雪姫を必ずや殺してやると心に決めました。お妃は3回も子どもを殺そうと試みましたが、回を追うごとにより確実な方法を取りました。

物売りのおばあさんに変装した性悪のお妃は、3回白雪姫を訪ね、飾り紐、櫛、毒リンゴを受け取らせました。小人たちが誰も家に入れてはいけないと注意したにもかかわらず、白雪姫は飾り紐と櫛を受け取り気を失ってしまました。2回目までは、小人たちが帰ってきてよみがえらせてくれました。しかし、毒リンゴを食べたときはダメでした。白雪姫が生き返らないので、小人たちは彼女をガラスの棺に入れ、山の上に置き、嘆き悲しみました。ふくろう、カラス、小バトが棺にやってきました。

長い時がたちました。ある日、別の王国から来た王子が森に迷い込み、白雪姫の棺を見ました。彼は白雪姫が好きになり、小人たちから贈り物として受け取りました。家来たちが棺を運ぼうとしたとき、木に足を引っ掛け、つまずいたため、棺がぐらりと揺れました。すると引っ掛かっていた毒リンゴのかけらが喉から飛び出しました。白雪姫は目を醒まし、王子が好きになりました。婚礼の披露が開かれ、悪いお妃も招待されました。そこで、お妃は焼けた靴を履かされ、死ぬまで踊り続けました。[1)]

3. 凍りついた気持ち

白雪姫の物語は、次のように始まります。「むかしむかし、冬のさなかのこと、たくさんの雪のひらが、羽のように、空から舞い降りていました。」たいそう美しい情景ですが、どこか寒々しい感じがします。降りしきる雪が音さえもかき消してしまい、生命の兆候がどこにも見当たりません。この様子をお妃が「まっ黒い黒檀の窓枠がついた窓」から眺めていました。黒い窓枠におさまった妃の姿は、葬儀用の写真を思い起させますが、あたかも後の妃の運命を予兆するかのようです。

お妃はいったいどんな気持ちで、雪を眺めていたのでしょうか？　むかし話の通例に習って、妃の感情は表現されていませんが、状況の描写から、生命の感じられない、冷たい、ゆう鬱な、満たされない「感情の凍りついた状態」となっていたのではないかと想像されます。

お妃は縫い物をしていて、雪を眺めたとき、針で指を刺し、血の滴が3つ、雪の上に落ちました。「縫い物」は古くより女性の仕事、持分とされてきました。衣服や装飾は、快適に楽しく生活していくために欠かすことができません。その必需品を心を込めて作る役割を主に女性が担ってきたのです。しかしこの物語では、女性的な役割がお妃の重荷となり、彼女の感情を冷たく動きのないものにしたのではないでしょうか。今日的に言うならば、家事の負担が女性の、母親の生き生きとした感情生活を曇らせることがあるということです。

針で指を刺すことは、痛みと出血を伴います。確かに痛みは好ましくないものですが、無感動、無感覚になった精神にとって、ある種の覚醒刺激になります。血が出ると私たちはふつう驚いてしまいますが、それは血の色の感じが、普段は皮膚や服に覆われている生々しい生命そのものを感じさせるからでしょう。どんなに気持ちが凍りついていても、内側では生命は赤々と息づいているのです。

血の滴が3つ、雪の上に落ちました。「3」という数字は、力動的で変化の動きを予感させます。この血を見たお妃は、「本当に美しく見えたので」と肯定的に評価しています。お妃の中に、生命が動き出さなければならない、このまま凍りついていてはならないという願いが呼び覚まされたのでしょう。その具体的な表れとして、子どもすなわち新しい命の誕生を望んだのです。一見唐突に見えるお妃の願いも、このように読み解いてみると自然な流れとして理解できるのではないでしょうか。

お妃の望んだ子どもの「雪のように白く、血のように赤く、窓枠のように黒い」特徴は、お妃の心的現実をそのまま反映しています。恐らくお妃は血の滴をきっかけとして自分の状況に目覚め、その凍りついたようなメランコリーを克服するため、子どもを通して自分の人生の意味を見い出したいと望んだのでしょう。

お妃の願いはかなえられ、女の子が生まれました。しかし、お妃はすぐに死んでしまいました。これは何を意味するのでしょうか？一つには、お妃の問題はそのままのお妃では解けないものであったということです。つまり、死を伴うほどの大きな変化を必要とするほどの課題であったということです。そもそも「お妃」という立場は、その王国の女性にとっての規範、モデルであります。お妃の在り方が行き詰ったということは、モデル自体の有効性が失われ、もはや「妃」としての存在が用をなさなくなったということでしょう。この意味でもお妃は死ぬ運命にあったのです。

課題は新たに生まれた白雪姫に引き継がれます。それまでとは違う女性としての生き方、在り方を模索し、新たなモデルを目指して白雪姫の人生が始まります。

4. 影としての継母

白雪姫は生まれるとすぐに母親をなくしました。子ども、特に幼い子どもにとって母親あるいは母親的存在は大変大き影響を及ぼします。よく母親は子どもにとっての「鏡」と言われますが、それは、母親の豊かな感情的

応答が照り返しを与えることによって、子どもの「自我」の萌芽が形成されるからです。幼児は、自分の状態に応じて母親が照り返す細やかな感情的ニュアンスの中に「自分」を認め、そこに自らが形作られていくのです。ところが、母親がいなかったり、いても感情的に凍りついていると、この照り返しがなくなってしまいます。母親がそこにいても、幼児は「母」を感じることができず、自分をも感じとることができなくなってしまうのです。ここから他者の評価によってしか自分を形作ることのできない「偽の自己（false self）」が育ってくるのです。[2] この意味で白雪姫は「鏡としての母親」を失ったのです。では、その鏡はどこに行ったのでしょう？

1年後に来た継母は、魔法の鏡を持っていました。子どもを照り返すはずの鏡を、継母は自分の美しさを確認するために用いていたのです。この鏡の使い方の中に、継母の魔女的な本質が表されています。

新しいお妃は、自分より美しい者がいるなんてとても我慢のできない人でした。「美しさ」に同一化しているといっても良いでしょう。しかもその美しさは、鏡の決める美しさ、つまり外面的な、外から見える美しさであって、決して内面性あるいは精神性と結びついたものでありません。見えるもの、外面的な評価に従ってしか自分の価値を測ることのできない態度は、まさに「偽の自己」そのものです。

つまり、新しいお妃は母親が亡くなったことのためにはびころうとする「偽の自己」を表すのです。このお妃が継母となったということは、母の不在が白雪姫にとって「真の自己」を脅かす否定的な母親として布置されたことを意味するのでしょう。

そもそも、白雪姫は「白い雪のお姫様」という名前からして、純粋な感情、穢れなくつながりを求めていく本能、純真に愛する力を表しています。まだ、利己心や隠れた意図に毒されていません。しかし、産みの母親は、白だけでなく、赤と黒が象徴することも白雪姫に求めました。穢れなき愛する力が、赤い生命と忍耐を要する黒い生活を統合して成長し、白雪姫が大人の女性性を獲得することが白雪姫にこめられたテーマです。その際、偽の自己を表す「継母」が布置されてくることは、おとぎ話の世界だけでなく、現実でもありうることなのです。

「継母」を表す「継（まま）しい」のドイツ語は、元来、「奪う、取り上げる」を意味しました。子どもがおもちゃで楽しく遊んでいるときに、「もう寝る時間ですよ」とおもちゃを取り上げる、あの時の母親です。この時の母親はいつものやさしいお母さんではなく、「鬼婆」になっているのです。子どもは誰しも母親のこうした二つの側面を経験的に知っていますが、実際の継母が必ずしも子どもから「奪う」ばかりではありませんし、実母が子どもを虐待する例も珍しくありません。しかし、古くから迫害的なイメージが継母に投影されてきたのでしょう。

否定的な母親コンプレックスは、「継しい母親」体験と深い関連があります。客観的にはどうであれ、主観的に迫害する母親イメージが積み重なると、否定的な母親コンプレックスが形成されていきます。おもちゃを取り上げられる、食事を与えられない、身の回りの世話をしてもらえない、理由もなく叱られる、イライラをぶつけられる、口をきいてもらえない、閉じ込められる、友人関係を詮索される、自由にやらせてもらえない、悪意のある考えを吹き込まれる、愚痴を聞かされる、放り出すと脅される、折檻される…。こうした体験に付随する痛み、やるせなさ、辛さ、イライラ感、恐怖、空腹、圧迫感、出口のなさ、絶望がこみ上げてきて、建設的な自我の働きの邪魔をするのが否定的な母親コンプレックスの特徴です。白雪姫は、「偽の自己」を体現する継母から、こうした辛い体験を強いられますが、いったいどのように切り抜け、成長していくのでしょうか。

継母は「嘘をつかない」魔法の鏡を持っています。鏡は、自分では直接は見ることのできない顔や後ろ姿を映し出してくれます。見

えないものを見えるようにしてくれるこの性質から、古くより鏡には不思議な力が宿るとされてきました。また、鏡は自分の姿を映し出してくれることから、自己省察、洞察に役立つ熟慮の比喩ともなります。ところが、お妃は鏡の力を他人を探り出すために乱用しています。例えば、自分を振り返るべきところで、他者に目が行ってしまう人のことが思い浮かびます。

白雪姫が7歳になったとき、自分より美しくなったことを知ったお妃は、嫉妬で心が煮えくり返り、ついには白雪姫を殺すよう狩人に命じます。お妃は、美しさについて自分を振り返ることがありません。より美しくなろうとか、内面的な美しさを求めるのではなく、白雪姫を排除することで、「一番の座」を守ろうとします。「他者からの評価」を妄信することが、いかに破壊的影響をもたらすかが見て取れます。

現実生活でも、母親が世間体をあまりに気にしすぎ、子どもを世間体に合わせようとするならば、子どもの成長しつつある主体性を損ない、ある意味で殺してしまうこともありえるのです。また、否定的母親コンプレックスが心の中でこうささやくこともあるでしょう。「お前の美しさ（能力、独自性）は認めない。そんなものに価値はない。皆と違うじゃないか。お前が世間と違って美しくなっても、お母さんはイライラするばかりだよ。いっそのこと、どこかへいなくなっておくれ。」こうして伸び行く美しさ（独自性）はねじ曲げられ、生きにくさがはびこっていくのです。

狩人は、すんでのところで白雪姫をかわいそうに思い、森に逃がしてくれます。否定的な母親元型には、しばしば残忍な男性像が伴います。例えば、ロシアの魔女ババ・ヤガーは「ひるまの騎士」「太陽の騎士」「夜の騎士」を従えています。[3] 狩人は、否定的母親コンプレックスの持つ凄まじい男性性の側面を示しますが、同時にそこにいくらかの優しさが含まれていることが分かります。

お妃は狩人が持ってきた肺と肝を白雪姫のものと信じて、料理をさせ、食べてしまいます。なんと凄まじいことでしょう。そして恐ろしいことには、白雪姫の本性を保持していると考えられる「肺と肝」を食べることで、白雪姫の美しさを取り込み、さらに美しくなろうとする動機を読み取ることができます。まさに娘の命を吸い取って生き生きとする母親の姿が髣髴とさせられます。ほとんど「悪」と化した継母からは、まだ小さな白雪姫は距離を取ることが最善でしょう。しかし、少女になりかけの白雪姫は、森深く独りぼっちでどうなっていくことでしょう。

5. きれい好きで働き者の小人たち

白雪姫は森を一日中走りとおし、やがて小人たちの家を見つけます。家に入ったとき、白雪姫は空腹だったにも関わらず、一つの皿から全ての料理を食べるのではなく、7つの皿から少しずつ食べています。ここに、白雪姫が自分の欲望だけでなく、他者の必要にも気を配ることのできることが分かります。白雪姫の関係のとり方が、自己中心的でないことが表れています。

白雪姫が小人たちにこれまでのいきさつを話すと、彼らは、料理、洗濯、裁縫、家事一般を引き受け、家の中を「きちんと、きれいに」することを条件に白雪姫を家に留まらせます。小人たちは鉱石や金を掘り出すことから、地下にある価値のあるものを探し出す創造的な仕事に勤しんでいます。彼らが小さいことは、見たところ小さくて価値はないものの、実際は非常に働きのある心的機能を体現していることを示しています。

小人たちと暮らし、家事に精を出すことは白雪姫にとって肯定的のように見えます。森の中の一軒家に引きこもった生活は、退行状態とも言えます。実際、何らかの感情的葛藤に直面し、引きこもったとき、ただ漫然と過ごすのは賢明ではありません。むしろ、それでも何らかの仕事・作業に関わって創造的な活動をした方が、むしろ深刻な葛藤状況の解決に向かうことができる、ということを表し

ているのでしょう。

家事といえば、白雪姫の産みの母親が縫い物をしていたことが思い出されます。母親は家事の繰り返しの中で、心が凍てつき、メランコリーに陥ったのかもしれないと述べました。しかし、だからといって家事自体がいけない訳ではなさそうです。

「ホレおばさん」や「うつしい娘ワシリーサ」などの他のおとぎ話でも、森の魔女の家を訪ねた娘は、必ずといってよいほど家事をきちっとすることを言いつけられています。[3] その言いつけを守った娘には、魔女も相応のお返しをします。ここに、女性を家事へと縛りつける封建主義的な古い考えを読み取ることもできないではありません。しかし、家事を女性に限定するというより、人間ならば女性であれ男性であれ、ある程度は分かち持つ「女性的側面」が担うべき活動として、家事をきちっとこなすことに価値が置かれているのではないでしょうか。そして、白雪姫と母親では、何かが違っていたのです。母親が子どもを願ったことから、愛する対象を求めていたことが分かります。愛することと結びつくとき、家事も人間を生かし成長させるものとなるのではないでしょうか。

6.　継母の誘惑と白雪姫の死

継母は鏡によって白雪姫がまだ生きていることを知り、どうやって殺そうかと考えます。物売りのおばあさんに変装し、飾り紐、櫛、リンゴを売りつけて、白雪姫を亡きものにしようとします。

まず、飾り紐とは何でしょう？　きれいな紐で娘の飾りになることから、一種の装飾品、おしゃれの道具と考えられます。胸に巻く紐のような装飾品と言えば、ギリシャ神話で女性の魅力を高める「魔法の帯」が連想されます。これは本来、愛と美の女神ヴィーナスの持ち物でしたが、ゼウスの妻となったヘラは、ここぞという時にこの帯をヴィーナスから借りて身につけ、ゼウスを夢中にさせた、と言われています。[4] 現代ならば、さしずめ勝負時に女性が身につける特別な下着といったところでしょうか。

継母はこの「愛と美」の紐を締め上げて、白雪姫を窒息させてしまったのですから、お妃の求める美しさが、いかに結びつきを求める愛に反し、愛を殺してしまうものかがはっきりします。美の求めが否定的母親コンプレックスに由来するとき、とりわけ娘の胸を締め上げる作用をもたらします。「母親的なもの」を連想させる豊満な肉体、性生活への嫌悪から、極端なダイエットに走り、やがては拒食症に陥ってしまう例を私たちは知っています。美しいはずのスマートな肉体を求めることが、女性としての成長を阻み、生命さえも脅かすのです。

小人たちが紐を切って白雪姫を助けると、継母は次に毒の櫛を使います。「櫛」は美しい髪を整え、女性の頭の形を見栄えの良いものにします。髪の毛は、頭から勝手に伸びてくるものなので、自由にわいてくる空想や思いを表します。ですから、櫛は空想や勝手な思いを整理し、見えやすい形に整える心的機能を表します。毒の櫛とは、当人を害するような思いつきや観念を育むことを意味し、白雪姫に象徴される「愛する力」と関連するものとして、ある種の「計算高さ」が連想されます。

櫛でも失敗すると、継母は最後に自分の命をかけて、毒リンゴを作ります。「リンゴ」の実は、愛の神ヴィーナスが手に持つように、愛、とりわけ性愛（エロス）の象徴とされてきました。また、エデンの園でエバとアダムがリンゴの実を食べたことから、罪を犯したのと同時に、意識的覚醒を経験しています。ですから、ここでのリンゴは性愛の経験とともにある種の目覚めのプロセスを表しているのです。白い面と赤い面を持つリンゴは、冷たい雪の、精神的な白い愛だけでなく、血の通った肉感的な赤い愛（エロス）がひとつになって、愛の全体性を形成しているのです。

継母がリンゴの赤い面に毒を入れたことで、エロスに混ぜものがされました。キューピッ

トとして知られているエロスは子どもの姿でイメージされるように、大人の姿をした他の神につき従います。そのように、エロスは、権力原理であれ、快楽主義であれ、自分とまったく異質の原理に長い間付き従うことができるのです。このため、エロスを他の原理のために勝手に利用しても構わないと思い違いすることが、毒されたエロスです。例えば、ある母親が「結婚するなら、何といっても経済力のある人がいいわね」と言い続けたとします。結婚生活にはある程度の経済的裏づけが必要ですから、この考えがまるでおかしいとは言えません。しかし、そこに「愛情にはお金が必要だ」あるいは「愛はお金で売れる(買える)」というニュアンスが入り込んでくるならば、これは毒として作用するでしょう。このニュアンスを信じて「飲み込む」ならば、その娘は愛に関して「死んで」しまうのです。そこから不感症が生じ、結婚生活がうまくいかなくなっても不思議ではありません。毒が身体に入り込んでしまうと、もはや取り出すことができず、小人たちがどんなに手当てしてみても、白雪姫は生き返りませんでした。

それにしても、小人たちがあれほど知らない人を家に入れてはならないと注意し、何度もひどい目にあっているのに、どうして白雪姫は戸や窓を開けてしまったのでしょう？私はここに、白雪姫が少女から思春期の女性へと変容していく鍵があるように思います。確かに、きれいな小人の小屋に閉じこもっていれば安全だったでしょう。しかし、何の変化も成長もありません。白雪姫が自らの生命を生きるためには、広い外の世界、とりわけ愛を表現していく飾り物とリンゴを得るという、自分の欲望を追い求めることが必要だったのです。自らの欲望に耳を傾けると毒を得てしまう危険がありますが、この一歩なしには、狭くて成長すべくもない小屋から出ることはできないのです。

白雪姫は死んだようになりましたが、変化しないため、小人たちはガラスの棺に入れて、山の高いところに置きました。毒リンゴのために白雪姫は動かなくなり、活動をやめました。しかし、白雪姫はそこにい続けたのです。

ガラスは見ることができるのに触ることのできない状態を良く表します。例えば、否定的な母親コンプレックスのために、愛することが分からないと思うかもしれません。「もう誰かを愛することなんてない、その方が傷つかなくていい。」このように思い込み、感情も冷えてしまった方にお会いするとき、なんと言ったらよいのか分からない気がします。でも、白雪姫がそうであるように「愛する力」は動きを止めることはあっても、なくなってしまうことはありません。愛らしい姿を見ること、思い描くことはできるはずです。それにしてもガラスに入り、感情に響かなくなった愛を呼び覚ますには、どうしたらよいのでしょうか。

7. 王子への贈り物

長い時の後、王子が森に迷い込み、美しい白雪姫を見て、譲り受けたいと願います。しかし小人たちに売る気はありません。王子が白雪姫を思う強い気持ちから、小人たちは白雪姫を王子に贈ることにします。

王子の「白雪姫を見ていなかったら、ぼくは生きてはいけないのだもの」は、恋するものなら誰でも感じることです。最初、王子は白雪姫を買おうとしますが、小人たちは決して売ろうとしません。このやり取りに白雪姫の表すものがよく表れています。「愛する力」はお金で買うことができないのです。それを手に入れようとするなら、贈り物としてもらうしかないのです。では、いったいどこからもらえるのでしょう。

私たちは誰でも心の内に森を持っています。人気のない、しんと音のするあの場所です。独りになり、あれやこれやの思いわずらいから離れるならば、魂はしぜんと森の中に入っていきます。そこで、白雪姫を発見することがあるのです。自分を自分の魂に向かって開くとき、私たちは思いもよらないものを発見します。実際のところ、多くの夢がこの糸口

を提供しているのです。

贈り物としてもらったものは、ふさわしく扱う必要があります。王子は家来たちに白雪姫を自分の国へと運ばせます。贈り物を自分の領域に迎える作業が必要です。このような主体的作業をしないばかりに、せっかくの贈り物がするりとどこかにいってしまうことが何と多いことでしょうか。

白雪姫を運ぼうとしたところ、家来が木に足をひっかけ、棺がぐらりと揺れました。すると、白雪姫の喉に引っ掛かっていた毒リンゴがぽーんと飛び出し、白雪姫はまた生き返りました。主体的な作業が偶発的な出来事を引き起こし、死んでいたものを生き返らせたのです。自分のものとして活用する過程で、予想できないこと、何らかの活性化、生命化のプロセスが起こってくるのでしょう。私たちはこの「奇跡」を信じてよいのです。

私たちの内にある「愛する力」も、いつ目覚めるのかは分かりません。むしろきっかけは外、つまり私たちの態度にあるのかもしれません。その時は、この物語によれば、王子が森に迷い込んだ時、つまり、私たちが「自分の森」に入っていける時かもしれないのです。

8.　婚礼と継母の消滅

婚礼には継母も呼ばれました。しかし、うろたえた継母が婚礼の場に行くと、まっかに焼けた靴をはかされ、踊りに踊って死んでしまいました。

婚礼は、白雪姫が王子と結婚し、新しいお妃となる儀式です。ほとんど死んでいた白雪姫がよみがえり、新しいお妃、つまり人々から女性の規範・モデルと見られる立場につこうというのです。このことは、愛する力がいまや意識の新しい原理として心的な場をリードすることを意味します。こうして産みの母親の凍てついた感情が、愛すること――関係を作り、結びつくこと――を保ちながらお妃になる白雪姫によって統合されたのです。

白雪姫の物語が示すように、このプロセスには、影としての継母が何度も白雪姫を死の間際まで追い詰めました。ある意味、影を出し切ることが必要だったのかもしれません。継母は全く意図しないことですが、結果として白雪姫の成長に寄与するわけで、このことは私の他の論文でも指摘してあります。[5] そして、この役目の終わった影は自らの嫉妬の炎に勝るとも劣らないほどまっかに焼けた靴をはいて、死ぬまで踊ります。否定的な母親コンプレックスが示す強烈な感情の嵐は、炎となって自らを焼き尽くしてしまうのです。

この物語で、白雪姫は終始受身に見えます。取り立てて何かをしたわけでもないのに、するすると時が来てお妃になってしまった印象を持つかもしれません。今日の女性にしても、これほどの受動性に共感することは難しく、むしろイライラさせられるかもしれません。

それにもかかわらず、この物語が今日でも魅力を持ち続けるのは、殺されそうになり消えそうになっても決してなくなることのない「愛する力」への信頼が白雪姫の姿と重なって、暗さの中により一層輝くからではないでしょうか。日常生活のマンネリ、あるいは心の傷によって冷え切ってしまった私たちの心にも、愛の輝きがともることがあるのです。白雪姫が輝くように。

注記

1）抄訳は筆者による。以下にこのおとぎ話からの引用がある場合は、「白雪姫」、大塚勇三訳『グリムの昔話2』福音館書店、1986、18-38頁によるが、一部の表記を読みやすく改めてある。

2）D・W・ウィニコット「本当の、および偽りの自己からみた、自我の歪曲」、牛島定信訳『情緒発達の精神分析理論』岩崎学術出版社、1977、170-187頁。また、D・W・ウィニコット「小児発達における母親と家族の鏡としての役割」、橋本雅雄訳『遊ぶことと現実』岩崎学術出版社、1979、156-166頁も参照。

3）「うつくしい娘ワシリーサ」、佐藤靖彦訳『ロシア民話集　カエルの王女』新読書社、1996、25-36頁。

4）アニーバレ・カラッチ作「ユピテルとユノ」、諸川春樹監修『西洋絵画の主題物語Ⅱ神話編』美術

出版社、1997、13頁。
5）高尾浩幸「母親コンプレックスから成長する女性性――「がちょう番の娘」のユング心理学的解釈」、文教大学臨床心理学科編集委員会編『人間科学としての臨床心理学』金剛出版、2004、171-183頁。